

アーレントの活動論再考

百木 漠

本稿では、アーレントの「活動」とはどのような営みであったのか、という素朴な問いを改めて探求する。その際、「活動」を「複数の人々のあいだの語り合い」と解する森川輝一の説と、これを広く「行為一般」と捉える橋爪大輝の説を手がかりとしながら、橋爪説に依拠して森川説を批判し、逆に森川説に依拠して橋爪説を批判するという方法を取る。これにより、本稿ではアーレントの「活動」概念を「相互行為＝人と人との間で進行する行為」として捉えるべきことを提案する。この相互行為は政治的行為にも言語的行為にも限定されず、「活動」と「語り」は原理的に分けて捉えるべきものとする。加えて、アーレントの「活動」概念には〈新しい何かを始める〉という規定も存在している。〈他者との相互行為〉という規定が古代ギリシア・ローマ思想に由来するのに対して、〈新しい何かを始める行為〉という規定はアウグスティヌスを経由したキリスト教思想に由来するものであるという見解を示そう。この二重性を見ることによって、「自然の中への活動」という概念や「アイヒマンの活動」に関するアーレントの発言を理論的に捉えることが可能となるであろう。

キーワード：アーレント、活動、語り、出生性、複数性、始まり

はじめに

ハンナ・アーレントの思想において、「活動」は最も有名かつ重要な概念のひとつであるが、この営みが厳密に何を指すのかという問いは、意外にもまだ十分に明らかにされていない。多くの先行研究では、それは〈公共的な語り合い〉を指すものとして扱われている。例えば、ジョージ・ケイティブは「〔アーレントの〕作品の全体にばらまかれているのは、政治とは活動であり、活動とは公的な事柄について公的に語ることだ、という理念である」（Kateb 2000:132）と述べており、ホーニグ、ヴィラ、ベンハビブ、ダントレーヴなどの著名なアーレント研究もこの点では基本的に同様の見解を示している

（橋爪 2020）¹⁾。

しかし、実際にアーレントが『人間の条件』のなかで「活動」に与えている定義は、「物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で進行する唯一の営み」、および「複数性という人間の条件」に対応する営み、というものである（HC:p.7/20頁）。この定義には「政治的」や「公共的」といった語句は含まれていないし、それが「語り合い」に限定されると明記されているわけでもない。「直接人と人との間で行われる唯一の営み」というだけであれば、そこには私的な行為も非言語的な行為も含まれうるだろう。従来の解釈は、アーレントの「活動」を政治的かつ言語的行為として理解する古代ギリシア的枠組みに囚われ過ぎていた節がある。

この点について柔軟な解釈を示しているのは、むしろ日本のアーレント研究者だと思われる。例えば森川輝一は、「活動」を古代ギリシアのポリスで行わ

i 関西大学法学部准教授

れていた政治的対話をモデルとして理解する主流派の解釈に異を唱え、「活動」は政治的な言論実践のみならず、学会での議論や家庭内での夫婦の会話といった「非政治的で私的な語り合い」をも含む、幅広い「語り合い」の営みだという解釈を示した(森川2011:19頁)。すなわち、「活動とは言葉によって人々の間で進んでゆく「語り合い」なのであって、「複数の人々による「語り合い」という行為の様式」に照らすならば、政治家による演説であれ、恋人や友人どうしの会話であれ、いずれも「活動」に含まれるはずだというのである。森川によれば、『人間の条件』は労働・制作・活動という行為の三様式を縦糸、公的／私的という二つの領域を横糸として展開される「行為の生活」をめぐる理論的考察の書なのであって、「活動こそ政治の本来的な行為の様式である」というアーレントの主張は、活動という行為がすべて政治的であることを意味するわけではない(森川2011:19頁)。

この点についてさらに踏み込んだ解釈を示したのが、橋爪大輝(2022)である。橋爪は、アーレントの「活動」(橋爪は「行為」という訳語を採用している)は、政治的行為や言語的行為に限られるものではなく、より広範な「行為一般」を指すものと解釈すべきだと提案する。例えば、手紙を書くとかナイフで野菜を切るといったわれわれの日常的行為もアーレントの「活動」に含まれると読むべきだということである。橋爪は、「活動」イコール「語り speech」と捉える主流派の解釈を退け、この二つをいったん切り離れたうえで、「活動」は「語り」によって言語的に分節化され「物語」化されることで理解可能なものになる、という新たな解釈を提示する(橋爪2022:36-56頁)。こうして、「活動」は政治的行為のみならず言語的行為にも限定されない「行為一般」として解釈されるべきだということである。森川が「活動」を政治的行為から解放したのに対し、橋爪はこれを言語的行為(語り合い)からも解放しようとしたのだと言える²⁾。

いずれも刺激的な議論だが、両者の解釈には幾つ

かの疑問も浮かぶ。本稿ではこの二人の「活動」解釈を手がかりとしながら、橋爪説に依拠して森川説を批判し、森川説に依拠して橋爪説を批判するという方法を取ることによって両者の不足点を明らかにする。そのうえで、筆者なりの新たな「活動」解釈を打ち出してみたい。筆者の考えでは、アーレントの「活動」は〈相互行為=人と人との間で進行する行為〉であり、それは政治的行為にも言語的行為にも限定されない。この点で筆者の考えは橋爪説に近いが、「活動」が複数の人々の間で進行する行為だと捉える点では森川説に近い。そのうえでもうひとつ重要になるのが、「活動」とは〈新しい何かを始める営み〉だという定義である。筆者の見るところ、アーレントの「活動」には、〈他者との相互行為〉——そのうちで特に重視されるのが〈公共的な語り合い〉という形式である——と〈新しい何かを始める行為〉という二重の規定がある。この二重性を捉えることによって、「自然の中への活動」やアイヒマンの「協調した活動」などの概念の意味を理論的に把握することが可能になるであろう。

一、森川説の批判的検討

まず森川解釈の批判的検討から始めよう。森川解釈については、「活動」を「語り合い」に限定することが適切なのかという疑問が浮かぶ。たしかにアーレントは「多くの活動——ほとんどの活動、といってもよいのだが——は、語りという様式において遂行される」(HC:178/290頁)と述べているから、基本的に「活動」とは「語り」なのだ解釈しても問題はなさそうに思える。加えて「語りなき活動というのはもはや活動ではない。なぜならそこにはもはや活動者はいないことになるからだ。そして活動者——すなわち行為 deed の行為者 doer ——が存在するのは、活動者が同時に言葉の語り手でもあるからなのである」(HC: pp.178-9/290頁)とも述べられているから、「活動」は「語り」とセットなのであって、「語りなき活動」は「活動」とは呼べないのだ、

と解釈するのが当然なように思える。

しかし、橋爪 (2022:36頁) が指摘するように、ほとんどの「活動」が「語り」の様式で遂行されるということは、裏を返せば「語りという様式において」遂行されない活動もある、ということが示唆されている。これも橋爪が強調するように、先の引用箇所が続く以下の記述もあわせて見ておくことが重要だ。

ある人が始めた活動は言葉によって人間的に開示される。その行為は口語を伴わない粗暴な肉体的現われにおいても感知されうるが、それは語られた言葉を通じてのみ妥当性のあるものとなるのであって、そうした言葉において人は自らのすること、なしたこと、しようとしていることを告げ、自らを活動する者として確証するのである。(HC : p.179/290頁)

この記述から示されるのは、(1)「活動」が言葉によって人間的に開示されること、(2) その「行為」は発語を伴わない肉体的なものでもありうること、(3) それ人間にとって意味あるものとなるのは言葉を通じてのみであること、である。前段の引用箇所で「活動者——すなわち行為の行為者」と言い換えられていることから、アーレントがここで「活動」と「行為」を同じ意味で用いていると考えられる。そうだとすれば、「活動」(行為)は「語り」(言葉)によって人間にとって意味をもつ営みとなるが、「活動」それ自体は言葉を伴わない行為でもありうる、ということになる。そして、「活動」とは「複数の人々の間の語り合いの行為である」という森川の解釈は、不十分なものであることになろう³⁾。

このことは、アーレントがしばしば「活動と語り」あるいは「行為と言葉」と二つの語を並置して記すことにも示唆されている。例えば、「人間は活動すること acting と語ること speaking において、自分が誰であるかを示し、そのユニークな人格的アイデンティティを積極的に明らかにし、こうして人間世界にその姿を現わす」(HC : p.179/291頁) という風

に。こうした記述は、「活動」と「語り」、「行為」と「言葉」が別々の営みであることを示していよう。別の箇所では、古代ギリシアの政治哲学において「活動と語りは分離し、ますます独立した営みとなっていった」、「重点は活動から語りに移り、[...] 説得の手段としての語りに移っていった」(HC : p.26/47頁) と述べられているが、こうした記述も「活動」と「語り」が同一のものではなく、別々の営みであることを示している。

われわれは何らかの行動を起こす際、大抵はその意図や意味を言葉によって説明するが、まったく無言のうちに行動する場合もありうる。その場合には、行為の意図が他者に伝わらなかったり、誤解されたままに終わってしまうことも多いだろう。その際、これも橋爪 (2022) の解釈から導かれるように、活動者本人でなくとも、周囲の人々がその行為を言語的に解釈し、理解可能な「物語」として開示すれば、それは「活動」として意味をもちうる。その反対に、活動者本人であれ、周囲の人々であれ、何者かがその活動を言語的に理解可能なものとして提示しなければ、その意味は伝わらぬままに終わるだろう。「語りなき活動はもはや活動ではない」という先の言明も、語りの主体は必ずしも活動者本人でなくてもよく、それを見聞きした周囲の人々、あるいは歴史家・物語作家・詩人などでもありうる、と解しておくことができる。

例えば、ある人が話し合いの途中でいきなり立ち上がり、無言でその場を立ち去ったとする。その際、事情を知る誰かが「彼はさっきの A さんの発言に怒って出ていったんだよ」などと説明すれば、それは意味をもつ行為=活動となり、ひとつの過程の「始まり」となりうるだろう。あるいはある人が無言の座り込みデモを始め、その行動に刺激されて、一人二人とその座り込みに参加する人々が増えていけば、これもまた活動者本人の「語り」が直接伴わなくとも立派な「活動」の一つになりうるだろう。ただしその場合にも、この座り込みの行為を伝え、評価する他者の「語り」が随伴する必要がある。さらには、

職場やサークル・部活動や友人の集まりなどの場でも、無言の(明示的な「語り合い」を伴わない)「活動」がある人によって取られ、その「活動」が良くも悪くも周囲に波及していく(それによって新たな過程が始まる)ケースは十分ありうるだろう。

セイラ・ベンハビブは、アーレントの「活動」をアゴニスティック 闘技ナラティブ モデルと物語モデルに分けたうえで、闘技的活動がつねに公的領域で行なわれ、各人の卓越性を競うものであるのに対して、物語的活動は必ずしも公的領域で行われる必要はなく、私的領域や親密圏において行なわれるものでもありうる、としている(Behabib 2003: pp.129-130)。そのうえで、その「活動」自体は「語り」でなくとも良く、無言の微笑みやジェスチャーや身体的な動きなどでもありうるという見解を示している。ただし、橋爪(2020)が評価するように、そうした無言の活動もつねに「物語的に構成される」ことによって意味をもつものになる。「アキレウスの憤怒、リア王の絶望、ハムレットの優柔不断、ピリー・バッドの無言の激怒、などにおいて典型的に現れる情熱や情動を表現する際には、(…)活動は闘技的なものになる」と述べられるように、こうした感情が無言で表出される行為も「活動」に数え入れられ、そうした「活動」が物語の最高の素材になるのである。マーガレット・カノヴァンも「あらゆる活動に語りが含まれているわけではない」としたうえで、「例えば、泳いでいる連中に溺れかけた人を救うために水に飛び込むこと、あるいは『革命について』のなかで論じられた、ピリー・バッドのクラッガートに対する感情がそれである」(Canovan 1992: p.131)と論じている。

アーレント自身も、アキレウスの戦場における活躍を「最高の活動」と表現し、「不死の名声」を得るに至った人物の事例として描いていた(HC: pp.193-194/312-313頁)。彼は「偉大な行為の行為者であり、偉大な言葉の語り手」である(HC: p.25/46頁)。ここでアキレウスの戦場における活躍それ自体は数々の暴力行為を伴うものであり、平和な語り合いとはほど遠い。それゆえその暴力行為だけで

はそれは「偉大な行為」とはなり得ない。あくまで親友パトロクロスの仇を討つために戦場へ赴き、宿敵ヘクトルを倒して復讐を果たし、最終的には自らも矢に倒れるアキレウスという一連の「物語」によって、その「活動」は偉大なものと認められるようになるのである。ここで彼の「活動」を「物語」とし、偉大な存在にしたのは、アキレウス本人の「偉大な言葉」だけでなく、吟遊詩人ホメロスによる「仕事」(創作の営み)でもあったと言えよう⁴⁾。

「活動」を「語り合い」の行為と定義する森川の議論に対しては、ひとまず以上のような批判を加えておくことができる。筆者は橋爪の説に倣って「活動」と「語り」は原理的に別々の営みとして考えるべきだという立場を取る。

二、橋爪説の批判的検討

ここまでは橋爪説に依拠しながら森川説を検討してきたが、次に森川説に依拠しながら橋爪説を批判的に検討していきたい。以下、橋爪説に対する疑問を提示していく。

第一に、橋爪が提唱するように、「活動」を政治的行為に閉じず「行為一般」として捉え直すのであれば、そこには「労働」や「仕事」の行為も含まれることになるのではないかと。すると、労働・仕事・活動という三区分別はカテゴリーとして重複を起していることになりはしないか。例えば「今日も家族のためによく働いた」とか「価値ある作品を創造できた」といった労働や仕事の営みも、言語によって分節化され、「語り」によって物語化される行為の一つだということになるのではないかと。しかし『人間の条件』のなかでアーレントが「活動」を「労働」や「仕事」をも含む上位概念としては規定しているとは思えない。もし橋爪説を徹底させるなら、アーレントの議論がカテゴリーミスを犯していることを批判するところまで進むべきではないかと。

第二に、橋爪の解釈によれば、「活動」は他者とともに行われる営みでなくともよく、例えば一人で家

で料理を作るとか、一人で外を散歩して家に帰ってくるとかいった行為も「活動」＝「行為一般」のうちに含まれることになる。しかしこの理解は、アーレントが「活動」を「直接人と人との間で行われる唯一の営み」と定義し、「活動」には他者の現前が必要とされると述べていたことに反するのではない。橋爪の解釈では「パソコンで家計簿をつける」といった、他者の現前を伴わない単独の行為も「活動」に含まれるということになるが、これはやはりアーレントの意図とは異なるのではないか。

第三に、橋爪は「出生性」の概念に全く触れていない。アーレントは、「活動」が「始まり」となるのはそれが「出生性」という人間の条件に深く結びついているからだとして繰り返し論じていた。橋爪は、「活動が始まりである」という命題も、「活動」が言語によって分節化され、「物語」となることによって初めて、ある行為が「始まり」として把握可能になるという言語論的構造を強調する。しかしそこには、「活動」による「始まり」が「第二の誕生」であり、出生性の条件に対応しているとアーレントが強調していたことについての言及はない。だがこの点への言及なしで、アーレントの「活動」概念の全容を解明することは不可能ではないか。

筆者の理解では、橋爪の解釈はこうした問題点・不足点を抱えている。一言でいえば、橋爪の「活動」概念はあまりに広すぎるのではないか。アーレントの「活動」概念を政治的行為のみならず言語的行為からも解放する道を開いたことは橋爪説の功績だが、他方でそれを他者との相互行為・共同行為という限定からも解放してしまうことは、アーレントの意図を裏切ってしまうのではないか。アーレントは「活動」は単独では行われえず、他者の現前を必要とすると明記している。

活動は製作と違って、独居 isolation においてはまったく不可能である。独居にあるということは活動能力が奪われていることに等しい。活動と語りが行われるためには、その周囲に他人

がいなければならない。(HC p.188/304頁)

この記述にもとづく限り、「活動」は他者の現前を伴う営みであって、「直接人と人との間で進行する営み」という定義もその意味で理解されるべきものと解するのが自然だろう。「活動者はずねに他の活動者の間を動き、他の活動者と関係をもつ」(HC p.190/307頁)といった記述も同様である。それゆえ筆者は、アーレントの「活動」概念は政治的行為にも言語的行為(語り合い)にも限定されないが、他者の現前を必要とし、他者との関わりを旨とする行為であると考えたい。この点で筆者の捉え方は、「アーレントが理解する活動は、本質的に相互行為 interaction であり、他の人々に向けられ、関係している」というカノヴァンの理解に近い(Canovan 1991: p.131)。

橋爪はアーレントの「活動」概念を「行為一般」を広く指すものと捉えたうえで、この世界には複数の人々が存在し、それぞれの行為が行為者の意図を超えて連鎖するために、それらの行為を連携させるための「政治」が必要になってくるという理路を提示する⁵⁾(橋爪 2022: 第二章)。しかしこのような説明は、アーレントが『人間の条件』で「活動」と「政治」の関係を論じる仕方とはかなり異なる印象を受ける。アーレント自身は『人間の条件』第一節で「活動」という営みを規定する箇所からして、「活動」を「政治」とほぼ一体化させて論じているという印象を読者に与えるからである。

活動とは、物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる唯一の営みであり、複数性という人間の条件、すなわち、地球上に生き世界に住むのが一人の人間 Man ではなく、複数の人間 men であるという事実に対応している。たしかに人間の条件のすべての側面が政治に関わってはいる。しかしこの複数性こそ、全政治的生活の条件であり、その必要条件であるばかりか、最大の条件である。(HC:p.7/20頁)

ここでアーレントは「活動」を先述のとおり定義したのちにすぐ、「たしかに人間の条件のすべての側面が政治に関わっている」と述べ、「政治」に言及している。こうした記述が、「活動」とは政治に関わる行為なのであろうと多くの読者に解釈させる大きな要因であろう。その直後に、人間の複数性こそが「全政治的生活の最大条件」だという記述も続くため、アーレントが「活動」や「複数性」を論じる際には、政治的行為を想定しているのだと理解されるのも止むを得ないところがある。

まず行為一般としての「活動」があり、複数の「活動」を連携させるものとしての「政治」があるという橋爪の見立てとは異なり、アーレント自身は『人間の条件』の冒頭から「活動」と「政治」を直接的に結びつけている。「活動が完全に姿を現わすのは、われわれがかつて栄光と呼んだ光輝く明るさが必要であり、そのような明るさは公的領域においてのみ存在する」(HC: p.180/293頁)と述べられることから、アーレントが公的領域における「活動」を最も重視し、私的領域での「活動」を不完全なものと捉えていたこともやはり確かなのである。

それゆえ、「活動」と「語り」を原理的に区別しつつも、なぜアーレントが「活動」のうちで〈公共的な語り合い〉という形式を重視していたのか、と問うことは引き続き重要である。ここで詳しくは展開できないが、その理由は、『全体主義の起源』から『人間の条件』への展開、その間に挟まれたマルクス思想への批判的検討、そこから発展した西欧政治思想の伝統全体の再点検という壮大なプロジェクト、という流れを把握することによって理解可能となるであろう(百木2018)。

橋爪の解釈はアーレントの伝記的要素を排しテキストを徹底して内在的かつ「哲学的に」(すなわち論理的・体系的に)読解する結果として、彼女がどのような文脈と意図において『人間の条件』を著したのかという思想史的考察をあえてスキップする。しかし、アーレント自身が若き日に全体主義(ナチズム)の恐怖を身をもって痛感し、「全体主義の諸起源

と諸要素」を探究する大著『全体主義の起源』を発表したうえで、西欧思想の伝統が見落としてきた「活動」や「政治」の意義を再考し、全体主義が根絶しようとした複数性と始まりの能力の重要性を解き明かすために『人間の条件』を著したという文脈を見なければ、彼女の活動論の意図を掴み取ることはできないだろう。そうした経緯は、政治思想史を専門とするCanovan(1992:特に第三・四章)や森川(2010:特に第三・四章)の研究がまさに明らかにしてきたものであった⁶⁾。アーレントの活動論を解明するにあたって、こうした思想史的考察も避けては通れないと筆者は考える。

三、出生性と始まりについて

次に出生性⁷⁾の問題を見よう。

橋爪は序論で「出生性」は『活動的生』と『精神の生』という二主著の全体を捉えるのにふさわしい概念ではない(橋爪2022:17頁)として、活動論の解明において出生性の議論に一度も触れていない。『人間の条件』第一節でも、アーレントは「三つの営みのうちで、活動が出生性という人間の条件と最も密接な繋がりをもっている」、「活動はとりわけて政治的な営みであるから、可死性ではなく出生性こそが形而上学的思考と区別される政治的思考の中心的な範疇であろう」(HC: p.9/21頁)と述べて、「活動」が出生性に対応する営みであることを強調していた。出生性という要素を外してアーレントの「活動」論および「始まり」論の全容を解明することはできない。この点も、まさに森川(2010・2020)が深く掘り下げて考察した点であった。以下では森川の研究に多くを学びつつ、筆者なりにアーレントの出生性をめぐる議論をまとめ直してみたい。

前節までに、筆者は「活動」が〈相互行為=人と人との間で進行する行為〉であることを強調した。しかしアーレントの「活動」にはもうひとつ重要な規定がある。それが、「活動」とは〈新しい何かを始める行為〉だという規定である。「活動するというのは、

最も一般的には創始する、始めるという意味である」(HC:p.177/288頁)。筆者の理解では、アーレントの「活動」にはこのように〈他者との相互行為〉と〈新しい何かを始める行為〉という二つの規定が存在し、この二つの行為が重なり合うことによって彼女の「活動」概念が構成されている。この後者が「出生性」という人間の条件に対応している。

「活動」と「出生性」の関係について、アーレントは「人間はその誕生によって「始まり initium」、新参者、創始者となるがゆえに、創始 initiative を引き受け、活動へと促される」(HC:p.177/288頁)と述べたうえで、「人間が造られたとき、それは『始まり』であり、その前には誰もいなかった」というアウグスティヌスの言葉を引くことによって、その根拠としている。しかし後者の言葉によって、前者の言明が十分に根拠づけられているとは言い難いように思われる。体系的論理性を重んじながらアーレントを読む橋爪が、「出生性」の議論を捨象した理由もそこにあったのではないかと推察する。他の著作でも出生について論じる際にアーレントがつねにアウグスティヌスの言葉を引くことに示されるように、彼女の出生論および始まり論は、アウグスティヌスを経由したキリスト教思想に支えられている⁸⁾。

アーレントは、「活動」をつうじた「始まり」とは「すでに起こったことに対しては期待できないような何か新しいことが起こること」であり、「新しいことはつねに統計的法則とその蓋然性の圧倒的な予測に反して起こり、それゆえに「新しいことは、つねに奇跡の様相を帯びる」という(HC:p.178/289頁)。ここで「奇跡」という宗教的な用語が用いられていることも示唆的である。アーレントによれば、人間の「誕生」それ自体がひとつの奇跡であり、それにもとづく「活動」による始まりも奇跡の様相を帯びる。さらに、生命が非有機体から生まれたことや、地球が宇宙の過程から生まれたこと、人間の生命が動物の生命から進化してきたこともそれと同類の奇跡であるという(HC:p.178/289頁)。こうした思考には明らかに、新しき生命の誕生を喜ばしきもの

と見るキリスト教思想からの影響を見出すことができる⁹⁾。

以上の点を踏まえたくて、以下の記述を見よう。

「始まり」としての活動が誕生という事実に対応し、出生性という人間の条件の現実化であるならば、「語り」は差異性の事実に対応し、同等者の間にあって差異ある唯一の存在として生きる、複数性という人間の条件の現実化である。(HC:p.178/289-290頁、「」は引用者が補った)

この記述によれば、複数性を実現するのは「活動」よりも「語り」のほうであり、出生性を実現するのが「始まり」としての「活動」である。『人間の条件』第一節の初めに規定されているように、「活動」は複数性だけでなく、出生性という人間の条件にも対応しているのであり、さらに腑分けするならば、この二つの条件を現実化するのがそれぞれ「語り」と「活動」であるということになる。このことは以下の記述とも連動している。

たしかにこのような誰 who の暴露 revelation は、その人の言葉と行為の両方のなかに暗示されている。しかし明らかに、「語り」と「暴露」の親和関係のほうが、「活動」と「暴露」の親和関係よりもはるかに強力である。それは、「活動」と「始まり」の親和関係のほうが、「語り」と「始まり」の親和関係よりもはるかに強力であることと対応している。(HC:p.178/290頁、「」は引用者が補った)

ここでアーレントは、「活動」と「始まり」の親和関係と「語り」と「暴露」の親和関係を対比させている。「語り」は、各個人の「誰」を暴露し、その結果として人々の複数性を実現させていく効果を強くもつものに対し、「活動」は従来のルーティンから外れた予測不可能な過程を「始める」ことにより強い意義をもっている。とはいえ、「活動」の大部分は「語

り」の様式で行われるのだから、多くの場合この二つはほとんど一体化しているのだが、図式的に分けるならば、「活動」が新たな過程^{プロセス}を始め、出生性を実現することに力点を持つのに対し、「語り」は人々の差異性を際立たせ、複数性を実現することに力点を持つのだということになる。

戸谷・百木(2020:254-280頁)でも論じたように、アーレントの活動論は(a)古代ギリシア・ローマの政治思想に影響を受けた相互行為、とりわけ〈公共的な語り合い〉を重視する要素と、(b)アウグスティヌス経由のキリスト教思想に影響を受けた〈新しい何かを始める〉ことを重視する要素の二つが絡みあって出来ている。図式的に見れば、(a)は各人の差異性を際立たせ、人々の複数性を実現する「語り」に対応するのに対し、(b)は新しい過程を始動させ、出生性を実現する「始まり」の能力に対応すると見ておくことができる¹⁰⁾。ただし多くの場合、この二つの要素は重なり合って現われてくる。「他者との対話や議論をつうじて、事前には予想もしていなかった方向に話が進んでいく」という風に。

「活動」を〈公共的な語り合い〉として捉える一般的な解釈は前者の要素を強調することが多いが、アーレント自身はむしろ「活動」とは〈何かを始めること〉であるという点をしばしば強調している。『人間の条件』に先立って執筆されていた『政治学入門』でも、「活動」はまず「新しい何かを始めること」として規定されている(PP:p.113/212頁)。加えて『政治学入門』では、「語り合う自由」と「自発性としての自由(新しい何かを始める自由)」が「別バージョンの自由」として位置づけられており、古代ギリシアではポリスの成立とともに、自由を体現する営みの重点が「活動」から「語り(言論)」へと徐々にシフトしていき、「語り合う自由」が「自発性としての自由」を追い払っていったと論じられている¹¹⁾(PP:pp.124-125/229-230頁)。

以上のように、アーレントの活動論を捉える際には、古代ギリシア・ローマ由来の〈相互行為〉としての「活動」とアウグスティヌス由来の〈始まり〉

としての「活動」の二重性を捉えておくことが肝要である。森川(2011)が強調する「アルケイン-プラッテイン構造」も、この二重の構造から改めて捉え返すことができる。すなわち、「活動」には「一人の人物が行う「始まり」」の部分(アルケイン)と「人々が大勢加わって、ある企てを「担い」、「終わらせ」、見通して、その企てを達成する」部分(プラッテイン)の二つの段階がある(HC:p.189/306頁)。ここで、第一の部分が〈新しい何かを始める行為〉に当たり、第二の部分が〈他者との相互行為〉に当たる。ただし、森川がこの「アルケイン-プラッテイン構造」を〈語り合い〉の行為に限定して捉えるのに対して、筆者はこれを〈語り合い〉に限定されない、無言の行為を含むものとして捉え直したい。

注目すべきは、第一段階の「始める」行為は「一人の人物」が行うものである、という記述である。「活動」は、基本的には複数の人々の間で進行する〈相互行為〉であるのだが、その「始まり」の部分を担うのはあくまで「一人の人物」である。それゆえ、「活動」を〈新しい何かを始める行為〉として規定し、その部分だけを取るならば、それは複数人による行為ではなく、一人の人物による行為だということになる。一人によって始められる「アルケイン」の部分と、複数の人々がそれに反応し、その過程に加わる「プラッテイン」の部分が合わさって、アーレントの「活動」概念は構成されている。「活動」とは〈公共的な語り合い〉であるという一般的な解釈から抜け落ちてしまうのも、この二重構造(とりわけ第一の部分)である。

〈新しい何かを始める〉という要素は、〈相互行為〉や〈語り合い〉という要素に付随するものではなく、むしろそれに並び立つ「活動」の規定なのである。

四、「自然の中への活動」をどう解釈するか

ここまで見てきたように、アーレントの「活動」は古代ギリシア・ローマ由来の〈他者との相互行為〉と、アウグスティヌス経由のキリスト教思想由来の

〈新しい何かを始める行為〉という二重の要素が重なり合って構成されている。

しかしこの二つの要素は必ずしも美しく重なり合うわけではない。ときにはその一方だけが強く現われ、他方が後景に退くということがありうる。そうした事例のひとつが「自然の中への活動 act into nature」という概念である。これはいわばアーレントの活動概念の応用編のようなかたちで『人間の条件』第3節「活動の過程的性格」に登場する。

自然の中への活動が拡大した結果、ついに自然を「作る」本物の術が現れた。つまり、これは人間がいなければ決して存在せず、地球の自然だけでは完成させることができないと思われるような「自然」過程を創造する術である。(HC: p.231/363頁)

ここで「自然の中への活動」とは、人間がテクノロジーを用いて自然過程に介入し、これまで自然界に存在しなかった過程を創り出そうとする行為を指すものとされる。近代科学(17世紀以降の自然科学)が自然を観察し模倣し再現しようとしたのに対して、現代科学(原子力開発以降の20世紀の科学)はもはや自然界に存在しない何かを人間の手で作りに出そうとしている。地球の自然には存在しなかった何かを科学技術によって作り出そうとする営みは、自然界から材料を取り出してきて耐久的な使用対象物を作る「仕事」の営みではもはやない。それはこれまで全くなかったような、そして予測不可能な過程を開始する営みであり、それは「活動」に他ならないということになる。

ここでも森川による的確なまとめに依拠して述べれば、現代科学が「仕事」ではなく「活動」のモードによって行われているという事態は、二つの局面から捉えることができる(森川 2017a:44-45頁)。一つ目は自ら「何か新しいことを始める」という活動の特質であり、人間の介入なしには生じ得ない「過程を解き放つ」という局面であり、二つ目は科学者

たちが「すべての歴史の中で最も潜在能力のある権力発生集団の一つになっている」という局面である(HC: p.324/502-503頁)。また「自然の中への活動」においては、「活動」が人間関係の網の目のうちへと行なわれるのではなく、宇宙の立場から自然事象のうちへと行なわれるものとなっている。そうした観点から科学者を現代において「活動」を「排他的な特権」として享受する人々として叙述するアーレントの筆致は、今なお示唆に富む。

目に見えない静かな実験室のなかで何世紀かの間に達成されたこのような成果を見ると、結局のところ明らかに、科学者の行為のほうが、政治家と呼ばれる人々の行政的・外交的行動よりも大きな報道価値と大きな政治的重要性を持っているというのも、当然すぎるほど当然のように思われる。もちろん、科学者はこれまで一般に社会のなかで最も非实际的で非政治的な人々であると考えられてきた。しかし結局のところ、このような人々こそ、活動の仕方を知り、とくに協調して活動する仕方を知っている残された唯一の人々であるというのは、皮肉と言えないこともない。(HC: p.324/502頁)

科学者による「自然の中への活動」にも、強力な権力集団を組織化する〈相互行為〉としての要素は確かに存在する。しかし、ここで重要なのはそれよりも科学実験のうちに〈新しい何かを始める行為〉のほうである。しかもその行為が人間事象のうちではなく自然現象のうちへと開始される点に大きなポイントがある。「人間の活動する能力こそ、人間の領域に解放されようが、自然の領域に解放されようが、結果が不確かです予測不可能な先例のない新しい過程を始める能力だからである」(HC: pp.231-232/364頁)。そしてこの「過程」はもはや科学者がコントロールできるものではなく、それによってもたらされる結果も不可逆なものとなっている。「活動がこのような側面を持っているために、いったん始め

られた過程の結果は予言できず、そこで近代では、脆さよりもむしろ不確実さのほうが人間事象の決定的性格となるのである」(HC : p.232/364頁)。

アーレントによれば、科学者たちの活動は「暴露的性格を欠いており、さらに物語を生み出して、それを歴史とする能力をも欠いている」(HC : p.324/503頁)。前節に述べたように、各人の誰 who を暴露するのは「活動」よりも「語り」のほうであった。「語り」によって各人の「活動」に意味が与えられ、それが「物語」として記憶される。しかし科学者たちの「自然の中への活動」はこうした「語りと暴露」の要素を欠いており、それゆえ物語として記憶されるという契機も欠いている。それゆえ、「自然の中への活動」とは「語りなき活動 speechless act」であり、その代わりに「新しい過程を始める」という要素が科学実験の領域で強力に前面に出てきているのだと捉えておくことができるだろう。

現代の科学技術を代表する数々の発明について、ほとんどの場合われわれはそれを発明・開発した科学者たちの名前やそれにまつわる物語を知らない。だが、われわれは日々その科学技術から大きな恩恵を受けている、あるいはその技術に生活のあり方を大きく規定されている。そのような「語り」を欠いた「活動」こそが現代の支配的な営みとなっている。例えば、〈山中伸弥教授は実験室で試行錯誤を重ねた末にiPS細胞の作成に成功した〉といった風に、科学者の「活動」を「語り」によって物語化することができれば、われわれはその「活動者」を認識することになるのだが、科学分野でそのような「語り」と誰 who の暴露が伴うケースは決して多いとは言えない。

『過去と未来の間』所収の「歴史の概念」にも次のような記述がある。

自然の中へと活動すること、つまり今後もおそらく確実にはコントロールできない自然のエレメントの諸力に直面せざるをえない領域のなかに人間の予言不可能性を持ち込むのは、危険

極まりない。しかし、それにも増して危険なのは、活動するという人間の能力がそれ以外のすべての諸能力を——製作人の能力や労働する動物の能力だけでなく、驚きに触発され観照のなかで思考する能力をも——歴史上初めて支配し始めた事実を無視してしまうことだろう。(BPF : p.62/81-82頁)

通俗的なアーレント解釈では、伝統世界において最高の地位を与えられていた「活動」の営みが、近代社会においては最低の地位へと転落し、公共性が喪失されてしまった、という図式が描かれることが多い。にもかかわらず、ここでのアーレントは、現代では歴史上初めて「活動するという人間の能力」がそれ以外のすべての諸能力(労働、制作、そして思考までも)を支配するようになったと述べている。驚くべきことに、「われわれがいま生きている世界にとっては、活動しうる存在者として人間を規定するのがふさわしいだろう。この活動する能力は人間がもつ他のあらゆる可能性のうちでも最も中心的な営みとなった」(BPF : p.63/82頁)とまで言うのである。現代において「活動」は衰退したところではない。むしろ歴史上、最高に「活動」が大きな影響力を及ぼし、われわれが「活動しうる存在者」として規定されるような事態が生じているというのである¹²⁾。

しかし言うまでもなく、アーレントはこの事態を喜ばしいものと捉えてはいない。その反対に、「活動の偉大さとその危険が人々の目にこれほど公然と露わになったことは、かつてなかったのである」(BPF : p.63/83頁)と彼女はいう。現代人は、高度な科学技術のうえに多大な利便性を享受しているいっぽうで、予測不可能で不可逆的な科学的過程につねに依拠しており、そのことが人類史上未曾有の危機をもたらしているとアーレントは警告を発するのである。

アーレントのいう「自然の中への活動」は「活動」を〈複数の人々の間での語り合い〉と捉える見方では上手く説明することができない。「活動」のうちの

〈始める〉要素が科学事象のうちで肥大化したものと捉えることによって、初めてこれを整合的に解釈できるようになるだろう。

五、アイヒマンも「活動」していた？

最後に取り上げたいのは、アーレントがヨアヒン・フェストとの対談のなかで、驚くべきことに、アイヒマンもまた「活動」していたと認めていたことについてである。

ここでは話をアイヒマンに絞りたいと思います。私は彼のケースのことはよく知っているから。そうですね、初めに私が言っておきたいのは、他の人々に同調すること *going along with the rest* は、多くの人々が共に活動すること *acting together* を含んでおり、そのことが権力を生み出すということです。あなたがどれほど強いかに関係なく、孤立している *alone* 限りは、権力と共にあることはできません。(TWB: pp.275-276)

その前段ではアーレントは次のように述べている。

彼 [アイヒマン] は他の人々と同調したがりました。「私たち」と言いたがりました。そしてこの〈他の人々に同調すること〉と〈私たちと言いたがること〉は、あらゆる犯罪のうち最も偉大な事例を可能にするのに十分なものだったのです。結局のところ、ヒトラー一味は実際この種類の状況の典型というわけでもなかったのですが、こうした他者からの支援なしでは権力を持ちえなかったでしょう。(TWB: p.275)

ここで述べられているのは、アイヒマンがナチ政権下で「他の人々と同調」しようとし、組織において「多くの人々と活動」していたこと、そこから権力が生まれていたということである。ナチズムとい

う全体主義運動の中心部にいたアイヒマンもまた「活動」していたという認識をアーレントが持っていたことは読者に驚きを与えるが、その驚きは、アーレントが「活動」をそれ自体として望ましい公共的(政治的)営みと見ていた、という前提をわれわれが持っているからであろう。このインタビューでのアーレントの発言によれば、「活動」それ自体は状況によって良きものにも悪きものにもなりうるし、全体主義に対抗するものにもそれを支えるものにもなりうる、ということになる。

「共に活動することから生じてくる権力の感覚は、それ自体は絶対的に悪いものではありませんが、総じて人間的なものです。ただ中立的なものです。(中略) こんな風に活動することには究極的な喜びの感情が伴うものです」(TWB: p.276) とも述べられているから、アイヒマンが「共に活動する」ことを通じて発生する権力を享受し、そこに「究極的な喜びの感情」を持っていたと考えられているようである。ただしアーレントは同時に、そのような状況が生じた事例としてアメリカ独立革命を挙げたうえで、そうした「活動」が完全に倒錯した *perverted* 状態が「機能化 *functioning*」である。ナチズムという巨大運動を支える巨大組織の「一機能」となることに究極の喜びを感じ、またそこで生じる権力を最大限に活用している状態、それがアイヒマンの味わっていたものだったとアーレントはいうのである。

ただし、他者と共に活動することに伴うあらゆること、例えば、互いに議論することや、一定の結論に到達すること、[それに伴う] 責任を受け入れること、我々が何をしているのかを考えること、機能化のなかではこうした事柄がすべてが消去されてしまうのです。そこにあるのはただの空虚な多忙さなのです。そしてこの空虚な機能化における喜びこそ確かにアイヒマンが感じていたものなのです。彼は権力を持つことに喜びを感じていたのか？ 私はそうは思いません。彼は典型的な一機能だったのです。

(TWB : p.276)

アイヒマンが行っていたのはナチスという組織の「一機能」になることであって、そこでは他者との〈語り合い〉や、それを通じた結論への到達、その結論を引き受ける責任を持つこと、自分たちの行動の意味を吟味すること、などの〈他者と共に活動すること〉に本来付随するはずの要素はすべて抜け落ちていた。そうであるとすれば、これもまた「語りなき活動」のひとつ（倒錯形態）であったということになる。それゆえに、ここでも「活動者」の顔は見えず、アーレントが「誰でもない者による支配」と呼んだ官僚制の統治だけが合ったということになる。

アーレントによれば、ナチ組織下でのアイヒマンも多数の人々と「共に活動していた」。そこには、ユダヤ人の強制移送業務を進めるにあたっての調整や交渉などのやりとりが含まれたらう。実際にアーレントは、アイヒマンは組織能力と交渉能力という二つの点において他の人より優れていた、と述べている (EJ : p.45 / 62頁)。ユダヤ人の「肉体的殲滅」という巨大プロジェクトを動かすにあたって、彼は多くの人々と協調して行動し、ときには対立する意見を調停して業務を遂行した。そのことが六百万人に及ぶユダヤ人の大虐殺 (ホロコースト) という過去に例を見ない惨劇をもたらした。ここでアイヒマンが行ったことを、多数の人々との「共同活動」と捉えることは確かにできるのかもしれないが、その「活動」が真の意味で複数性や公共性を実現するものであったとはやはり言い難いだろう。『エルサレムのアイヒマン』の末尾でアーレントは架空の判決文を記し、あなたはこの地球上でユダヤ民族および他のいくつかの国の民族とともに生きることを拒否した、それゆえにあなたは絞首刑にならねばならない、と告げていたが (EJ : p.279 / 384頁)、この宣告は、アイヒマンの行動と思考が複数性と公共性を欠いたものであったと彼女が考えていたことを示している。そうだとすれば、アイヒマンの爲した「活動」は、多

数のナチ関係者との共同行為 (相互行為) ではあったが、本来「活動」が実現すべき複数性という根本条件を欠くものであった、ということになる。その意味で、彼の行為は「倒錯した活動」であったと言える。

これが倒錯しているというのは、官僚制とは本来画一的なルールのもとで画一的な行動を組織人に要求するものであり、そこでは各人の複数性や差異性が実現されることはありえず、「活動」の要件が満たされるはずはないからである。官僚制とは「統治の最も社会的な形式」であって、「社会」とは「無数の多様な規則」を人々に押しつけることで、「活動」の可能性を排除し、代わりに画一的な「行動 behavior」を要求する領域であるはずだった (HC : p.40 / 64頁)。にもかかわらず、そこでアイヒマンが「共に活動」していたというアーレントの驚くべき発言が、彼女の活動概念の複雑さ (分かりにくさ) を示している。

ナチ組織の元でアイヒマンが「活動」していたとするならば、それは彼が多数の人々と共同してナチズムのイデオロギーの実現を推し進める、歴史上かつてなかった「新たな過程」を最悪のかたちで始動させるものであった、ということになる。その意味で、彼の爲した「活動」には〈公共的な語り合い〉という要素が欠落しており、官僚制の元で〈新しい過程を始める〉という要素が醜悪なかたちで現われたものであった、と捉えておくことができよう。

〈新しい何かを始めること〉は必ずしも良い帰結をもたらすとは限らない。その反対に、「活動」によって始められた過程がかつてないほどの大惨事を招く可能性も十分に考えられる。そのことは、高度に発達した科学実験においてであれ、官僚制においてであれ、同様である。「自然の中への活動」という表現に合わせて言うならば、アイヒマンが行なった行為は「官僚制の中への活動」であったと表現することもできるだろう。

このことから分かるのは、「活動」それ自体は良きものにも悪きものにもなりうるし、全体主義に対抗するものにもそれを推し進めるものにもなりうる、

ということである¹³⁾。全体主義が根絶しようとした複数性と自発性という人間の条件を再考（再興）するために、アーレントは『人間の条件』以降、「活動」について深い考察をめぐらせたのであるが、アーレント自身が「活動」はときに全体主義に加担するものにもなりうることを発言していたことは押さえておく必要があるだろう。

20世紀の大衆社会において、アーレントが理想のものとする公共的な「活動」が退潮したことは明らかである。しかし他方で、「自然の中への活動」という科学的営みや「官僚制の中への活動」とでも呼ぶべき集团的営みは史上かつてなく威力を発揮している。こうした「活動」は全体主義を支えるものにもなりうるし、全体主義と並ぶ脅威を人類に与えるテクノロジーの暴走をもたらすものにもなりうる。この逆説的な事態こそが、アーレント活動論の奥深さを物語っている。

結論

本稿では、アーレントの「活動」とはどのような営みであったのか、という素朴な問いを改めて探求した。その際、「活動」を「複数の人々のあいだの語り合い」と解する森川説と、これを広く「行為一般」と捉える橋爪説を手がかりとしながら、橋爪説に依拠して森川説を批判し、逆に森川説に依拠して橋爪説を批判するという方法を取った。そのうえで、筆者自身の見解として、アーレントの「活動」を〈相互行為＝人と人の間で進行する行為〉として捉えるべきだという提案を行なった。その際、この相互行為は政治的行為にも言語的行為にも限定されず、「活動」と「語り」は原理的に分けて捉えるべきだが、同時に彼女が〈公共的な語り合い〉という「活動」の様式を重視していたことも事実であって、その理由を『全体主義の起源』から『人間の条件』への発展という思想的観点から確認することも必要であるという見解を示した。

もうひとつ、アーレントの「活動」概念には〈新

しい何かを始める〉という要素があり、〈相互行為〉としての「活動」が古代ギリシア・ローマに由来するのに対して、こちらはアウグスティヌスを経由したキリスト教思想に由来している。この二重性を見ることによって、「自然の中への活動」という概念についても、これは科学実験の場で〈新しい何かを始める〉という要素が肥大化し、〈他者との相互行為〉の要素が縮小した「活動」のあり方だと捉えることができる。またアーレントがインタビューで言及したアイヒマンの「活動」も、官僚制のなかで多数の人々が共同して最悪のかたちで〈前例のないプロセスを始める〉という営みであったと捉えることが可能となる。

〈他者との相互行為〉と〈新しい何かを始める行為〉という二つの要素は必ずしも調和的に重なるわけではなく、このようにして一方のみが肥大化して他方が収縮するという可能性もありうる。公共的な事柄をめぐって複数の人々が意見を交換し合い、それを通じて新しい始まりがもたらされるといった二つの要素が理想的に重なり合うあり方だけがアーレントの「活動」のイメージとして普及しやすいが、単純にそれだけではないということ、この二つの要素がアンバランスな形で現われることもありうるという点を踏まえておく必要がある。

Hannah Arendt Key Concepts と題された論集のなかで、「労働・仕事・活動」の章を担当したポール・ボイスは、「アーレントが活動という語で何を意味しているかを数行で要約することは困難である。それは数多くのアイデアを結びつけて、大きく一貫性をもった挑戦的な概念へと作り上げたものである」（Voice 2014：p.43）と述べているが、筆者も同感である。他者と関わりあうこと、複数の人々と語り合うこと、新しい過程を始めること、それを通じて各人の唯一性と差異性を表現し、人々の複数性と出生性を実現すること、その他多くのアイデア・思想が詰め込まれ、凝縮されたところにアーレントの「活動」概念が形成されており、これが世界中の読者を惹きつけているのである。その複雑さをわれわれ

は丁寧に解きほぐしていかねばならない。

注

- 1) 例えば、ホーニッグやヴィラは議論の冒頭から「政治的活動」のみに焦点を当てて議論を展開している (Honig 1993, Villa 1995)。ダントレーヴは「活動」のコミュニケーションな性格や表出の性格を論じつつ、やはり政治的行為としての活動を前提としている (d'Entreves 1994: 第2章)。この点、橋爪 (2020) が評価するように、ベンハビブは闘技的活動と物語的活動という分類を示しながら、「活動」を必ずしも政治的対話に限定せず、私的なものや非言語的なものも含めてそのナラティブな構造を論じている (Benhabib 1996: 第5章)。
- 2) 橋爪は言及していないが、マーガレット・カノヴァンが「語りと活動は同一ではない」という見解をいち早く示していたことは注目に値しよう (Canovan 1992:p.131)。アーレントは「語りと活動を同じ次元で論じることがよくある」としつつ、「あらゆる活動に語りが含まれているわけではない」ことをカノヴァンは論じている。
- 3) 厳密に言えば、森川は「『活動』とは…「人々の間で直接続いてゆく唯一の行為」であり、その主要なモードは言葉による交わり (語り合い speech) である」(森川 2011: 19頁) と述べているから、すべての「活動」が「語り合い」であると断定しているわけではない、とも読める。ただし、森川は次の段落で「先に述べた定義に従えば、活動とは言葉によって人々の間で進んでゆく「語り合い」である」として以降は、「活動」イコール「語り合い」として議論を進めている。
- 4) さらに、愛にもとづく「活動」も考えられる。アーレント思想において、愛は「非政治的であるどころか反政治的である」(HC: p.242/379頁) ものとして知られているために、それは「活動」の正反対に位置するもののように思われるかもしれない。しかし実際には愛こそ「物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行われる営み」であろう。「愛は人間生活ではめったに起こらないものであるとはいえ、それは実際、自己暴露の比類なき力と「誰」を暴露し明晰に可視化させる比類

なき力を持つ」(HC: p.242/378頁) とされるように、われわれは愛において相手が「何 what」ではなく「誰 who」であるかにも関心をもち、その過程で相互の「誰」をこのうえなく暴露する。言うまでもなく、こうした特徴は「活動」の重要な要素であった。愛する者どうしが言葉を介さず、表情や身体の動きによってその気持ちを伝えようとするとき、それもやはり「活動」の一つとなりうるだろう。また、ナザレのイエスが苦しむ人々や貧しい人々の間に分け入ってゆき、救済をもたらしたことは、愛にもとづく「活動」の実践であったと見ておくことができるだろう。少なくともイエスの実践した「赦し」の行為は「活動」のひとつであったとアーレントは明言している (HC: pp.240-241/374-376頁)。

- 5) 「活動 (行為)」と「政治」の関係について橋爪は次のように述べている。「アーレントの思想全体を見れば、多くの場合、行為には政治的行為の意味も込められているように思われる。だが、それがすべてではない、といたいのだ」(橋爪 2022: 27頁)。
- 6) 例えばカノヴァンは次のように述べている。「われわれが『全体主義の起源』から『人間の条件』への彼女の道のりを辿ることにかくも長い時間を費やしたのは、そのような脈絡のなかでのみ『人間の条件』が正当に理解できることにあるからである」(Canovan 1992:p.99)。「このことが意味しているのは、『人間の条件』の主要テーマが、われわれが彼女の全体主義についての省察からの展開と理解してきた思考の流れから直接出てくるということである」(p.103)。
- 7) そもそも「出生性 natality」とは何であろうか。筆者の理解を記しておく。アーレントによれば、人間の生と動物の生のあり方は根本的に異なる。動物は円環的な自然過程と一体となって生きており、種の存続にこそ意味があるため、個体の生死は意味を持たない。それに対して、人間の生は円環的な自然過程を横切る直線的な生を生きる。その生には明確な始まり (誕生) と終わり (死) があり、世界における出現と消滅という二つの出来事に制約されている (HC: p.97/152-153頁)。その生は出来事に満ちており、「最後には物語として語るこ

とのできる」ものとなる。かように有限な時間の内を生き、その生が明確な始まりと終わりをもつ物語として語られるような生を生きる存在として人間が生まれてくることをアーレントは「出生性」と呼んだ。一方で、そのような存在として終わりを迎えるという条件を「可死性 mortality」と呼んだ。生命としての「誕生 birth」は人間が動物と共有するところであるが、その「誕生」がひとつの「始まり」となるところが人間は動物と決定的に異なる。ここに人間固有の「出生」と動物と共通の「誕生」の区別がある。

- 8) 『人間の条件』「活動」章の最後で、「人々が誕生したことによって行ないうる活動」がもつ「始まりの能力」によってこそ、人間事象に「信仰と希望が与えられる」と述べられていたことから推察されるように (HC: p.247/386頁)、アーレントの始まり論および出生性論には「信仰と希望」に近い何かが含まれているように思われる。『全体主義の起源』第二版に追加されたエピローグ「イデオロギーとテロル」の締めくくりにも、そうした「信仰と希望」あるいは「祈り」に近い何かが含まれている。人間の複数性と自発性を根絶しようとした全体主義という「新たな統治形態」に対抗するために、アーレントが大著の最後に記した希望と祈りだったのではないかと以下に引用する。「しかしまた、歴史におけるすべての終わりは必然的に新しい始まりを包含するという真理も残る。この始まりは約束であり、終わりがもたらし得る唯一の〈メッセージ〉なのである。始まりは、それが歴史的出来事となる以前には、人間の至高の能力なのだ。政治的に言えば、始まりとは人間の自由と同一のものである。「始まりが為されんがために人間は創られた」とアウグスティヌスは言った。この始まりは一人一人の人間の誕生によって保証されている。始まりとは一人一人の人間なのだ」(OT: pp.478-479/[3] 354頁)。
- 9) 森川 (2010・2020) によれば、アーレントの「出生」の思想が誕生したきっかけは、1952年5月に彼女がヘンデルの『メサイア』を鑑賞し、「私たちの許に子どもが生まれた」と書きつけたことにある。この言葉はもともと『イザヤ書』において救世主(メシア)の誕生を祝うためのものであった

が、アーレントはこれを「すべての始まり」が聖なるものであり、「どの新しい誕生も」救済の約束であると読み変えた (森川 2020: 72頁)。それゆえあらゆる子どもの誕生に「始まり」を見出すアーレントの出生思想は、アウグスティヌスに依拠しつつ、彼の思想を独自に読み変えて生み出されたものであると言える。

- 10) アーレントは人間が複数の存在であることの根拠を『創世記』の「神は男と女、彼らを造った」(HC: p.8/20頁) という言葉に見出しているように、出生性と複数性はほぼセットになっており、単純に切り分けることができないことも確かである。人間は誰もが生まれながらにして唯一無二の(ユニークな)存在であり、「われわれは誰一人として、過去に生きた他者、現に生きている他者、将来生きるであろう他者と、決して同一ではない」(HC: p.8/21頁)。他の生物・存在物と異なる人間の特徴は、その生まれながらの他性 otherness と差異性 distinctness を自らの「活動」と「語り」によって表現し、それを伝達することができるという点にある (HC: p.176/287頁)。この「活動」と「語り」が出生性と複数性の両方を実現(確証)するのだ。
- 11) 古代ギリシアのポリス成立以前には果敢な「事業や冒険」が〈始まり〉をもたらし「活動」であったが、ポリスの成立以降は、徐々にそのような「活動」が衰退し、自由を体現する営みが「語り(言論)」のほうへシフトしていき、さらにプラトン以降の西欧思想の伝統においては「活動」と「語り(言論)」が分離し、〈始まりとしての活動〉は衰退し、忘れ去られていったと論じられている (PP: pp.124-126/229-231頁)。
- 12) アーレントは「われわれが今住んでいる、あるいはおそらく今後住み始めることになる科学技術の世界が、産業革命によって生じた機械化された世界といかに決定的に異なっているか」という点に注意を促す (BPF: p.59/77頁)。「産業革命によって生じた機械化された世界」は「制作」によって生み出されたものであるのに対し、「われわれが今住んでいる、あるいはおそらく今後住み始めることになる科学技術の世界」は「活動」によって生み出されたものである。この対比は、『人間の

条件]エピソードの最後で触れられている近代(モダン)と近代世界(モダン・ワールド)の対比におおよそ対応していよう。

- 13) 森川(2017b:21頁)は、「むしろアレントは、活動の危険性にこそ目を凝らしていたのではないか」と述べ、「活動の危うさは、誰かが何かを始め(アルケイン)、別の誰かがその成就に加わる(ブラッテイン)、というその原理に由来する」と論じている。このことは、第一次世界大戦後のドイツにおいて、ヒトラーが勇ましい演説を始め、その運動に数多の人々が加わった結果として、立憲政体の枠組みを食い破り、世界大戦を引き起こし、それでも止まらずに、行政的大量殺人という誰もが予測できなかった出来事を成し遂げてしまった」という事例に示されているという見解を示している。

参考文献

アレントの主要著作については以下の略号を用いた。
BPF *Between Past and Future: Eight Exercises in Political Thought*, Penguin Classics, 2006 [原著 1961・1968]. (= 『過去と未来の間』, 引田隆也・齋藤純一訳, みすず書房, 1994年。)

EJ *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*, Penguin Classics, 2006. (= 『新版 エルサレムのアイヒマン』大久保和郎訳, みすず書房, 2017年。)

HC *The Human Condition*, The University of Chicago Press, 1958. (= 『人間の条件』, 志水速雄訳, ちくま学芸文庫, 1994年。)

OT *The Origins of Totalitarianism* (new edition), Harcourt Brace & Company, 1973 [原著 1951]. (= 『新版 全体主義の起原』1-3, 大久保和郎・大島通義・大島かおり訳, みすず書房, 2017年。)

PP *The Promise of Politics*, edited by Jerome Kohn, Schocken Books, 2007 [原著2005]. (= 『政治の約束』, 高橋勇夫訳, ちくま学芸文庫, 2018年。)

TWB *Thinking Without a Banister*, edited by Jerome Kohn, Schocken Books, 2018.

橋爪大輝, 2020, 「活動／行為——それは語りなのか」, 『アレント読本』, 日本アレント研究会(編),

法政大学出版局, 59-68頁。

———, 2022, 『アレントの哲学——複数的な人間的生』, みすず書房。

戸谷洋志・百木漠, 2020, 『漂泊のアレント 戦場のヨナス——ふたりの二〇世紀 ふたつの旅路』, 慶應義塾大学出版会。

百木漠, 2018, 『アレントのマルクス——労働と全体主義』, 人文書院。

森川輝一, 2010, 『〈始まり〉のアレント——「出生」の思想の誕生』, 岩波書店。

———, 2011, 「アレントの「活動」概念の解明に向けて——『人間の条件』第二四-二七節の注解」, 『聖学院大学総合研究所紀要』, 第50号, 13-49頁。

———, 2017a, 「ハイデガーからアレントへ——ハイゼンベルク「不確定性原理」との対向を手がかりに——」, 『アレントと実存思想 実存思想論集XXX II』, 実存思想協会(編), 理想社, 29-55頁。

———, 2017b, 「アレントの「活動」論再考——「評議会」論を手がかりに」, 『アレントと二〇世紀の経験』, 川崎修・萩原能久・出岡直也(編著), 慶應義塾大学出版会, 3-28頁。

———, 2020, 「はじまりと出生——自由の原理と、その困難」, 『アレント読本』, 日本アレント研究会(編), 法政大学出版局, 69-77頁。

Benhabib, Seyla, 2003, *The Reluctant Modernism of Hannah Arendt*, Rowman & Littlefield Publishers.

Canovan, Margaret, 1992, *Hannah Arendt: A Reinterpretation of her Political Thought*, Cambridge University Press.

d'Entreves, Maurizio Passerin, 1993, *The Political Philosophy of Hannah Arendt*, Routledge.

Honig, Bonnie, 1993, *Political Theory and the Displacement of Politics*, Cornell University Press.

Kateb, George, 2000, "Political action: its nature and advantages", *The Cambridge Companion to Hannah Arendt*, edited by Dana Richard Villa, Cambridge University Press. pp.130-48.

Villa, Dana, 1995, *Arendt and Heidegger: The Fate of the Political*, Princeton University Press.

Voice, Paul, 2014, "Labor, Work and Action", *Hannah Arendt Key Concepts*, edited by Patrik Hayden, Acumen, pp.36-65.

Rethinking Hannah Arendt's Theory of Action

MOMOKI Bakuⁱ

Abstract : This study reexamines the simple question, “What is Arendt’s action?” Although action is the most important activity in Arendt’s thought, it is still difficult to strictly define the meaning of action. Many scholars have understood that action is the activity of public discussion, exchanging opinions on public issues. However, Arendt herself distinguishes action from speech, which means that action is not limited to the speech act. That is, action can be a speechless act. By contrasting and criticizing the interpretations of Morikawa Terukazu and Taiki Hashizume, I clarify that action is limited to neither public deeds nor speech acts. Instead, I propose to define action as the interaction that goes on between people. Although action does not always need to take place in the form of speech, it needs to be expressed or interpreted by someone’s speech so that its meaning is understood. Furthermore, I suggest that Arendt’s action has two main elements. One is the element that emphasizes the importance of public discussion, which derives from the political thoughts of ancient Greece and Rome. The other is the element that emphasizes the importance of beginning something new, which derives from Augustine’s philosophy. The former corresponds to the human condition of plurality and actualizes each actor’s uniqueness, while the latter corresponds to the human condition of natality and initiates the unprecedented process. These two elements can appear in harmony, for example, when people exchange opinions in a public space and unpredictable events occur. However, these elements do not necessarily go together beautifully. Sometimes one element comes to the fore, while the other recedes. By grasping these two aspects of Arendt’s action, we can understand the structure of “perverted action” such as “act into nature” and Eichmann’s “acting together.”

Keywords : Arendt, Action, Speech, Natality, Plurality, Beginning

i Associate Professor, Faculty of Law, Kansai University